



女子大生会計士の事件簿4

—
山田真哉

英治出版

監査ファイル

1

〈逆さまバレンタイン〉事件——返品・問屋の話——

1

今年も例の日が近づいていた。

今年こそは何としても萌さんからあれをゲットしたい。が、黙っていてもくれる人ではないので、僕は思いきって自分から催促することにした。

朝、監査先の会社へ行く途中。

萌さんと僕は幹線道路の脇の歩道を歩いていた。

「萌さん、もうすぐバレンタインデーですよ。チョコは準備してますか」

「はーっ、憂鬱な季節がまたやってくるのね」

萌さんはそう言ってため息をついた。

「どうしてブルー入っているんですか」

「配るほうは大変なのよ。いいことなんて一つもないし」

「でも、疲れたときにチョコみたいな甘いものをもらえると元気になりますよ」

「そんなこと、言われてもねー」

「それに、チョコを渡されたほうはとっても幸せな気持ちになるんです。だから、パレンタインにはチョコをくださいよ」

「バカねー。だいたい、女性からチョコをもらおうという根性が気に食わないの。そういえばイタリアに旅行に行ったときとかは、素敵な男性からパレンタインにチョコをもらったわー」

「へえー、それは結構なこと……イタリアでもずいぶんとモテていたんですね」

「って言っても、スキーツアーのときにバスの運転手さんが乗客の全員にチョコを配っただけなんだけど」

「なーんだ。そういうことですか」

「違う、違うの。そういうことが言いたいんじゃないんで、欧米では男性のほうからも渡してくれるものなの——」

2

チョコレートを主力商品としているお菓子メーカーへ光琳製菓株式会社への本社へと監査に来た萌さんと僕。

萌さんは調べていた帳簿類の中から、へ返品リストという束を見つけてきた。どうやらお菓子の返品のが気になったらしい。

そこで、萌さんは会社の経理担当者に質問をした。

「返品はどうしているの」

「お菓子には賞味期限があるので、結局廃棄処分になってしまう場合が多いですね」

「なるほどね。それで返品はどうやって回収しているの」

「大半はうちの営業マンがまわって回収していますよ。しかし、地方の間屋や小売店の場合は、先方に廃棄処分してもらおうときも多いですね」

「先方で廃棄処分？ どうして？」

「リストラで営業マンを減らしたので、地方までくまなく回りきれないんですよ。送ってもらおうにしても送料はウチの負担なので、先方で廃棄処分してもらったほうが安く済むんです」

「ふーん……」

萌さんはしばらくの間、へ返品リストの束を見ながら何かを考え込んでいた。

光琳製菓からの帰り道。

「萌さん、今年のバレンタインデーって何曜日か知ってます？」

「あんたもバレンタイン、バレンタインとしつこいわねえ。今年はたしか今週の土曜日のはずよ」

「えっ、そうだったんですか……」

「どうやら、今年はバレンタインデーに萌さんに会うチャンスすらなさそうだ。」

「そういえば、うちの事務所にスキーツアーってなかったっけ」

萌さんが尋ねてきた。

「ええ、ありましたよ。たしか今度の土日ですけど」

「今度の土日ね……」

萌さんはなにやら考えている様子だ。

「私、事務所のスキーツアーに参加する！」

何を思ったのか、萌さんは突然そんなことを言い出した。萌さんの意図はわからないが、直感的に僕は思った。せつかくのチャンスを逃してはならない！と。

「ぼ、僕も参加します！ いやー、ちょうどスキーしたいなー、って考えていたところだったんですよ。あははー」

「念を押して言っておくけど、一箱にいてもチョコなんか絶対あげないからね」

「そこまで言わなくてもいいじゃないですか……」

二月一四日。

スキーツアーに集まったのは総勢五〇名ほどの大人数だった。大津さんやその婚約者の翡翠^{ひすい}さんも一緒だ。

バスの中では、翡翠さんがみんなにそこそこ高価なチョコを配っていた。

「萌さん、見てくださいよ。さすがは翡翠さん。やっぱり、チョコを配っているじゃないですか」

「ぶーっ」

萌さんが膨れているのを見て、前の座席にいた大津さんが声をかけた。

「あはは、萌ちゃん。あのチョコは俺が担当しているお菓子の問屋さんが、社内販売価格で安く譲ってくれたものなんだよ」

「あれっ、そういえば、萌さんもお菓子メーカーを担当していたような……」

僕はそう言いながらチラリと横目で萌さんを見た。

「ぶーっ、ぶーっ」

萌さんはますます膨れていた――。

しばらくして、僕らはスキー場に到着した。

みんなは思い思いにスキーやスノボを始めたのだが、萌さんはみんなと離れてスキー場周辺の旅館街へと向かっていった。

「あれっ、萌さん。そっちには遊ぶところなんてありませんよ。萌さん、聞いているんですか。萌さんーん！」

僕は不思議に思っ、萌さんのあとを追った。

「あっ!? ごめん、坊や」

雪を踏みしめながら早足で萌さんを追っていた僕は、地元の子供にぶつかってしまった。軽くはね飛ばされたその子を、先に進んでいた萌さんが戻ってきて萌さんが助け起こした。

「大丈夫？　こんなに大きな大人がよそ見をしていちゃ、危ないわよねー。怖かったよねー」

子供の服についた雪を払い落としてあげながら、萌さんは僕をにらんだ。

「そうそう、このへんにお菓子屋さんとか知らないかなー？」

萌さんは子供に尋ねた。

「うん。知ってるよ！」

その子供は嬉しそうな顔をして、旅館街の外れにある古びたお店へと案内してくれた。

お店の名前は狩野商店。そこはボロっつい外見に似合わず、最新のお菓子からマイナー

なお菓子まで、多くの種類がそろっていた。

「街でもないようなお菓子がね、ここにはたーくさんあるんだよ！」

子供はそう自慢げに話した。

「大人たちは『もうすぐこの店もつぶれる』って言うけど、そんなことないよね、お姉ちゃん！」

「そ、そうねえ……」

子供の問いかけに戸惑いながら、萌さんは背負っていたリュックの中からへ返品リストの束を取り出した。

そして、リストを見ながら次々とお菓子を手にとって見ていた。

「——ここにあるお菓子の大半が、このへ返品リストにも載っているわ」
萌さんはつぶやいた。

「どういうことですか」

「つまり、『返品するから廃棄処分した』と言ったにもかかわらず、こうして堂々と売っているのよ——これは悪質な不正行為だわ」

僕たちの声が聞こえたのだろうか、店主と思われるおじいさんがでてきた。

「お客さまはどちらさままで」

「このお菓子を作っているメーカーの監査をしている監査法人の者です」
僕が丁寧に応えた。

「それは、それは。遠いところまでごくろうさまです」

「ちょっと聞くけど、これは処分したはずのお菓子じゃないの？」

「返品リスト」を片手に、お菓子を指差しながら萌さんは言った。

「うむ……」

店主は沈黙した。

「私は会計士なので不正を見逃すことはできないの。正直に言って」

「……お察しのとおり、これらには廃棄処分として報告した商品が数多くあります」

「やっぱりね。どうしてそんなウソの報告を」

「最近では遠くの街に大型のショッピングモールや一〇〇円ショップができてきたりして、この町で買えるものをする人は激減しております。お菓子屋もやっていけないので、もうたもうかとも思ったのですが、学校帰りに買っていく子供たちの嬉しそうな顔を見ると、どうしてもたまたむことができなくて……」

ふと子供のほうを見ると、とても悲しそうな顔をしている。

「お姉ちゃん、ここのお菓子屋さんは悪いお店なの？」

「い、いや、それはね……」

「お姉ちゃんはこのお菓子屋さんをつぶしにきたの？」

「違う。違うの、そうじゃないんだけど……」

萌さんはそう答えるのが精一杯だった。

「もういい！ 帰って、帰ってよー！ー！」

店をあとにする僕らに投げかけられたのは、泣きながら叫ぶ子供の声だった。

4

僕らはロッジへと戻った。

「このことは光琳製菓に報告するんですか、萌さん？」

「ええ、もちろんよ。不正を見逃ごすことなんてできないじゃない」

「でもこのことがわかれば、あのお菓子屋さんには確実に潰れてしまうんじゃないですか？ 小さなお店を僕らの一言で潰してしまうのは、なんか嫌ですよ。あの坊やだって、

とても悲しむでしょうし」

「そんなこと言われなくても、わかっているわよ！」

萌さんは怒った口調で言ったが、目には涙を浮かべていた。

「だって、仕方ないじゃない……私たちは監査人なんだし」

それからずっと萌さんは落ち込んでいた――。

夜のスキー場。

萌さんは相変わらず落ち込んだまま、ロッジのテラスから外を眺めている。

「萌さん。はい、これをどうぞ」

「何よ、カッキー。これって……」

「チョコレートですよ。疲れたときには甘いものが一番です」

「……ありがと、カッキー」

チョコを受けとった萌さんは、包みを外してちよっとかじってみた。

「おいしい……本当にありがと」

「今日はバレンタインデーですからね。気にしないでください。あつ、男から渡してま
すからへ逆さまバレンタインでですけど」

「あはっ。……たしかに、もらうとちよつとは幸せな気持ちになれるわね」

萌さんは本当に嬉しそうに微笑んだ。

「落ち込んでばかりもいられないわね。やっぱり、あのお店をみすみす見殺しにするわ
けにはいかないわ」

「さすが萌さん、僕は信じてましたよ！……でも、いったいどうするんですか。今回
の不正を見過ごすんですか」

「今回の不正の件はちゃんと報告するわ」

「じゃあ、潰れちゃうじゃないですか」

僕の言葉に、萌さんは首を強く横に振った。

「そうは問屋がおろさないわよ」

「またずいぶんと古風なもの言いをするんですね。全然、女子大生っぽくない……」

「だから、そうは問屋がおろさないのよ——」

特別コーナー

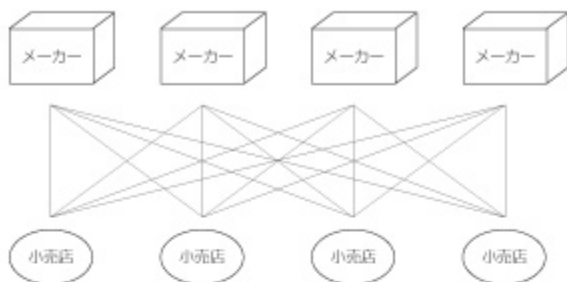
「それでは突然だけど、『なぜっ？ なにっ？ 萌ちゃん!!』の時間よ」

「はあ……いったい唐突に何の真似なのでしょうか」

「世の中の『なぜっ？ なにっ？』について、ありがたくも私、藤原萌実がやさしく教えてあげよ」「ナーなのよ」

「またまじぶんと同様な『どうですかね』」

「そんなことは置いておいて、今回の『なぜっ？ なにっ？ 萌ちゃん!!』は『問屋さんはなぜあんなのっ?』よ」



①メーカー ↓ 小売店

②メーカー ↓ 問屋 ↓ 小売店

「メーカーから小売店に直接商品が運ばれることを直接取引(①)と言って、問屋さんを通すことを問屋取引(②)とよんでいる」

「外資系のスーパーとかは、問屋を飛ばした直接取引を増やしているんですね。問屋を通さないほうが断然安くなるのに、どっしってわざわざ問屋取引なんてあるんですが」

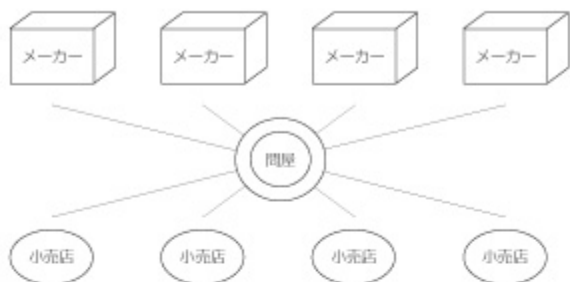
「じゃあ、上の図を見て」

「メーカーから小売店のあいだに線は何本ある？」

「ええーっと、四かける四で一六本ですよ」

「じゃあ、あいだに問屋さんがあるとどうなる？」

「あっ、半分の八本になりますね」



「このように問屋さんの存在は、流通経路を減らして効率的にする効果があるのよ。わかったかな〜」
 「わ、わかりましたけど。あの〜、僕はいつたい何のためにこんなことを萌さんに教わっているのでしょうか……」

「バカね、そんなこともわからないの？ この〈問屋〉こそが、狩野商店を立て直す鍵を握っているからじゃないの——」

〈特別コーナー おわり〉

6

翌朝、狩野商店から出てきた僕は、店の前で待っていた萌さんから声をかけられた。

「どう、聞いてきた？」

「はい、問屋は永徳物流というところだそうです」

「それはよかったわ。これで、なんとかなるかもしれないわね」

「問屋の名前を聞いてきて何になるんです？ 問屋を飛ばして直接メーカーと取引させたほうが値下げできるんじゃないですか」

「それは甘いわよ。だいたい小さな小売店だとメーカーには相手にされないわ。だから、さっきも説明したとおり、問屋を活かしたほうがいいのよ」

「問屋を使うのはいいですけど、それが狩野商店の立て直しと何か関係があるんですか」

「狩野商店の立て直しのポイントは、大型店に負けなくらいの品ぞろえの確保よ。この目的を達成するためには、問屋さんも巻き込んだ対策を考えたほうがいいのよ」

「問屋も巻き込んだ対策ですか。萌さんは問屋に知り合いでもいるんですか」

「狩野商店が取引している菓子卸の永徳物流は、たしか大津さんが担当している会社のはず。大津さんを通して、永徳物流に助言するのよ」

「だんだん話が大きくなってきましたね。それで、何て助言するんです？」

「うーん。問題はそこなのよねー」

「……それじゃ、意味ないじゃないですか」

僕は広大なゲレンデを前にして一生懸命に考えていた。

ふとゲレンデのほうを見ると、萌さんが軽快にスノボで滑走していた。

「萌さん。人が対策を一生懸命考えているのに、なに遊んでいるんですか！」

「安心しなさい、もう対策は考えたわよ」

スノボを外しながら、萌さんが言った。

「問屋を巻き込むにしても、この衰退している町でお店を立て直すことなんて至難の業なんです。どうしてそんな対策案が、遊びながら簡単に出てくるんですか」

「それは逆よ」

萌さんは真剣な顔で答えた。

「ここで遊んでいて気がついたのよ。ここは衰退している町なんかじゃない」

「どうして、いまさらそんなことを言いだすんですか。狩野商店の店主だって言っていたじゃないですか『町の人はみんな遠くの街の大型店まで行ってしまおう』って」

「だから、この町のお店は新たな市場を広げる必要があるのよ」

「そんなこと簡単に言いますが、市場の拡大なんて難しいんですよ。第一、そんな市場がどこにあるんですか」

「あなたはどこに目をつけているのよ。市場ならここにあるじゃない——スキー場という名の市場が」

萌さんはスキー場全体を見渡して、大きく手を広げた。

「ここは何十万人という人が訪れるリゾートよ。それも若くて流行に敏感な人たちがたくさん来る。この人たちが町のお店まで足を運ぶようになれば、市場は何倍にもなるわ」

「なるほど……でも、そう簡単にお店にまで足を運ぶようになるのでしょうか。よっほ

どの秘策でもない……」

「——秘策ならあるわよ」

萌さんはニコリと笑ったが、ここでは何も言ってくれなかった。

スキー場からの帰路。

僕は帰る前に再び狩野商店に立ち寄った。

「——いい？ こうやって情報を集めて、こう書けばいいから。そして、これからは返品報告したものは、ちゃんと廃棄処分にするのよ。それで、なんとかあと一年持ちこたえて。きっと変わるはずだから」

そう店主のおじいさんに告げて、萌さんは店を去ろうとした。

「このお店にまた何しに来たんだよ！」

店の前で子供がにらんでいた。

「そんなににらまなくてもいいのよ。お姉ちゃんはまだもう帰るから」

萌さんが優しくそう言うと、子供は表情を崩して、泣きそうな顔で萌さんを見上げた。

「ねえ、お姉ちゃん。このお店はやっぱりつぶれちゃうの？ おじいちゃんは『もうすべてがおしまいだ』って言ってたけど」

「あのね、お姉ちゃんに任せて。このお店はこれからもちゃんとあるから。そして一年後には、もっとたくさんのお菓子があるはずだから」

萌さんは子供の前にしゃがんで言った。

「本当に？」

「本当よ」

「じゃあ、一年後にまたここに来てね。約束だよ」

「わかった、約束するわ」

夕暮れの中、子供と萌さんは指切りをしていた。

7

ちょうど一年後、僕は事務所のスキーツアーで再びあのスキー場へとやってきた。

そして、萌さんと僕は狩野商店を訪れた。

外観は相変わらずボロいままだったが、店内は劇的に変化していた。

それは何人かのスキー客がお菓子を買いにきていたこと、そして、「あっ、品数がこんなにある！ 見たことないお菓子もある！」と僕が驚くくらいに、たくさんの種類のお菓子で店内が溢れかえっていたことである。

「店主さんのレポート、光琳製菓でも好評だったわよ。いい新商品ができそうだって」

萌さんが、あの店主のおじいさんに声をかけた。

「ありがとうございます。見たことがないような新商品のおかげで、都会からのお客さんたちにも来てもらえるようになりました。これも会計士さんのご助言のおかげです」

「——いったい何をアドバイスしたんですか、萌さん？」

「スキー場のお客に興味を持ってもらうようにするためには、まず興味を引くような品ぞろえからじゃない。だから問屋さんを巻き込んで、ここを新商品の実験場にしたのよ」

「新商品の実験場ですか!？」

「そう。問屋さんを通じてメーカー各社から期待の新商品を集めて、ここで販売してみる。スキー場から来るお客さんは若くて流行に敏感な人が中心だから、若い人の求める嗜好は何なのか、という絶好のマーケティングがここでできるのよ」

「ここで評判がよければ、大量生産して全国展開するっていうことですか」

「そういうこと。最近はどこも不況だから、いきなり大量生産なんてどのメーカーもなかなかできないからね」

「ここで実験とはいえ、商品が増えれば、お客も増えるということですか」

「そしてマーケティングの有用性を上げるために、数字だけじゃなくて、店主さんの感想もつけたレポートを作ってもらって永徳物流に送ってもらっていたのよ」

「そのレポートが各メーカーに配信されて、光琳製菓の商品開発にも活かされていたんですね。そっか、このお店がいつの間にか最先端のアンテナショップになっていたんですね」

「そういうこと……」

「お姉ちゃん！」

店の中で、子供が萌さんに声をかけてきた。

「あつ、あのときの子供じゃない」

「あのね、お姉ちゃんの言うとおりにになったよ！ お店はつぶれなかったし、お菓子の数もたくさん増えたんだ！」

「そう、よかったわね。お姉ちゃんの言ったとおりでしょう」

「うん！ ……あ、そうだ。お姉ちゃん、これあげる」

子供はきれいに包装された小箱を萌さんに渡した。萌さんは包みを開けた。

「あつ、チョコレートじゃない……」

「そう、バレンタインチョコだよ」

「ありがとう！ ほら、カッキー、見て見て。バレンタインチョコよ。ほーら、ちゃんと男の子だってチョコをくれるじゃない。私、今から年下好きに乗り換えようかしらー」

「いや、去年僕だってチョコをあげたじゃないですか」

「そうだったけ？ そんなこと遠い昔に忘れたわ。これからの時代は、やっぱり年下の彼

氏よねー。もう、チヨコもらって、お姉ちゃんはずっかり坊やに惚れちゃったわー。決めた。私、この坊やと付き合う！」

「あのー」

子供がそう言って、浮かれている萌さんの袖を引つ張る。

「どうしたの、坊や。坊やは年上の女性は嫌い？ 優しくするわよー」

「あのー、あのー」

「年の差のことが心配なのね。大丈夫よ、愛さえあれば」

「あのー、あのー、あのー」

「まだ何か心配なことでもあるの？」

「——わたし、女の子なんだけど」

「……えっ!？」

